

自分の考えを持ち、主体的に学ぶ生徒を育てる指導
— 生徒が自分の考えを説明し合う学習を通して —

栗原市立栗原西中学校 小川 康輔

概 要

本校では「志学：『志』をもち進んで学習する生徒」を育てることを学校教育目標としているが、見通しを持って学習に取り組み、自己の学習を振り返って次の学びにつなげるなど、主体的に学ぶ姿勢は日常の観察ではあまり見られない。各種の調査では、自分の考えを説明する設問に無解答が散見される。

本研究の目的は、生徒が自分の考えを持つことに焦点を当て、社会的事象について自分の考えを説明し合う学習を通して、主体的に学ぶ生徒を育てることを目指すものである。

1 主題設定の理由

新中学校学習指導要領では生徒に生きる力を育むことを目指し、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことに重点が置かれた。人工知能の飛躍的進歩やグローバル化の進展など変化の激しい時代に生徒が主体的に生き、他者と協働して課題を解決していく力や社会に見られる課題を多面的・多角的に考察し、様々な人と意見を交えながら課題を解決する力などが求められている。これらを受け、社会科では、「社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」ことを一つの目標にしている。新中学校学習指導要領を踏まえ、社会科の授業づくりでは、生徒が社会的事象の意義や特色、事象間の関連について考察・判断したことを説明したり、議論したりする学習を充実させることが必要である。そのためには、生徒が学習課題の解決への見通しを持つこと、課題の解決に向けて自分の考えを説明したり議論したりすることができるよう、時間や場を設定することが必要であると考え。

本校生徒の実態として、教科書に記載されている語句を覚えることで満足する傾向にあり、疑問に感じたことを自ら調べたり調べたことをまとめたりする姿勢は、日常の観察ではあまり見られない。各種の調査では、社会的事象の因果関係を説明したり自分の考えを述べたりするなど、思考力、判断力、表現力等を問う設問に無解答が散見され、歴史的分野では顕著に現れる。本校生徒を対象とした社会科の実態調査では、社会的事象について自分の考えを説明することに半数以上の生徒が苦手意識を持っていることが分かった。このような生徒の実態は、教師から生徒に知識を与える授業に傾倒していること、生徒に思考させたり判断させたりする時間や場が十分に設定されていなかったことに起因していると考え。

本校の課題を解決するために社会科では、生徒が課題の解決に向けて調べたことを基に自分の考えを形成し、他者に説明したり議論したりするを通して、自分の考えを広げられるような学習を設定したい。生徒一人一人が自分の考えを他者に説明したり議論したりする中で、考えが広がる楽しさや課題をよりよく解決する有効性を感じることは、主体的に学びに取り組む態度を育むためには欠かせないと考え。そこで本研究では、生徒が自分の考えを説明し合う学習を通して、自分の考えを持ち、主体的に学ぶ生徒を育てることができると考え、本主題を設定した。

2 主題・副題について

2. 1 「自分の考えを持ち」について

本研究では「自分の考えを持ち」を、精査した情報を基に、学んだことや生活経験を関連付けながら自分の考えを形成し、表現できる状態と捉える。

平成28年12月21日の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下、平成28年中央教育審議会答申）では、「資質・能力の3つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理」の中で、思考、判断、表現の過程として「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」があるとしている。平成28年中央教育審議会答申を踏まえ、自分の考えを表現できる状態までを含んで捉えることとする。

2. 2 「主体的に学ぶ」について

本研究では「主体的に学ぶ」を、生徒が見通しを持って学習に取り組み、学習を振り返り、次の学びにつなげる状態と捉える。

見通しを持って学習することや振り返りについて、平成28年中央教育審議会答申の社会科における主体的な学びの視点の中で、「主体的な学びについては、児童生徒が学習課題を把握しその解決への見通しを持つことが必要である。そのためには、単元等を通した学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに、学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し、児童生徒の表現を促すようにすることなどが重要である」としている。

生徒が学習の見通しを持ち（Plan）、学習に取り組み（Do）、学習を振り返り（Check）、次の学びにつなげる（Action）、PDCAサイクルを回すことができるようになることで、主体的に学ぶ姿勢が育まれると考える。

2. 3 「自分の考えを説明し合う学習」について

本研究では「自分の考えを説明し合う学習」を、生徒が学習課題を解決するために調べ、精査した情報を基に自分の考えを形成し、他者に説明したり議論したりすることを通して考えを広げ、課題をよりよく解決する学習とする。

平成28年中央教育審議会答申「学校教育を通じて育てたい姿と『生きる力』の理念の具体化」では、「対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるときにも、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること」を、学校教育を通じて育てたい子供の姿としている。

生徒が自分の考えを説明するだけでなく、他者の考えを理解して自分の考えを広げることは、課題をよりよく解決するために必要なことと考える。答申を受けて本研究では、生徒が自分の考えを他者に説明したり議論したりすることを通して、他者の考えを理解し、自己の考えを広げることができる学習を設定したい。

「自分の考えを説明し合う学習」の留意点を、以下の3点とした。

- ① 生徒が持っている知識や生活経験を生かせること
- ② 生徒が社会的な見方・考え方を働かせることができること
- ③ 生徒が他の生徒と協力しながら解決できること

①は、生徒が持っている知識や生活経験を課題解決のために生かせることにより、学ぶ意義を感じさせるものである。②は、実社会の課題を解決するために必要となる社会的な見方・考え方を育てるためのものである。③は、課題をよりよく解決できるよう、他の生徒と学び合いながら解決する方法を学ぶためのものである。

3 研究の目的と方法

本研究の目的は、まず、生徒が自分の考えを持つことに焦点を当てる。その上で、社会的事象について自分の考えを説明し合う学習を行う。実践を通して、主体的に学ぶ生徒を育てることを目指すものである。研究をより有効なものにするために、生徒を対象にした学習に関する実態調査を実施し、結果を分析する。調査の分析を踏まえ、生徒が自分の考えを説明し合う学習を行う授業展開を組み立てる。単元指導計画と1単位時間の授業展開を作成し、授業をする。授業実践を通して、生徒の変容を授業での

観察や振り返りシートへの記入内容、2回目の実態調査から見取り、本研究の検証と改善を図る。

4 研究の実際

4. 1 実態調査と分析

4. 1. 1 調査のねらい

社会科の学習についての生徒の実態を知り、実態を改善するために、生徒が自分の考えを持ち、主体的に学ぶ生徒を育てるための研究の方向性や手立てを考察する資料とする。

4. 1. 2 調査対象

栗原市立栗原西中学校 第2学年 55名

4. 1. 3 調査期日

令和元年6月18日、11月20日

4. 1. 4 調査方法及び内容

(1) 調査回数 2回

(2) 調査方法 質問紙法（選択肢式、記述式）

(3) 調査内容 社会科の学習に対する生徒の意識調査（生徒対象）

4. 1. 5 調査結果及び分析（図1）

地理の学習と歴史の学習について「どちらかといえば苦手」「苦手」と回答した生徒は、どちらも全体の半数を超えた。歴史の学習を得意としている生徒の割合は、わずか2%であった。

社会科の学習で疑問を持つことについて、「毎回ある」「時々ある」と回答したのは、全体の73%であった。「あまりない」「まったくない」と回答した生徒は全体の26%であり、社会的事象について疑問を持たない生徒が全体の3割程度いることから、社会的事象を自分事として捉えていないことが推測される。

疑問や興味を持ったことを調べることにについて「あまり調べない」「まったく調べない」と回答した生徒は、全体の26%であった。その理由として「調べることを忘れてしまう」「（調べる）時間が少ない」「（調べるのが）面倒くさい」「調べてもよくわからない」などの記述回答があった。

記述回答から、調べたいことを調べる時間がないと感じている生徒がいることが分かった。また、知りたいことを地図やグラフなどの資料を活用して効果的に調べることができていない生徒がいることも分かった。さらに、社会的事象への興味が低い生徒や調べるのが面倒と感じている生徒もいることが記述回答から分かった。

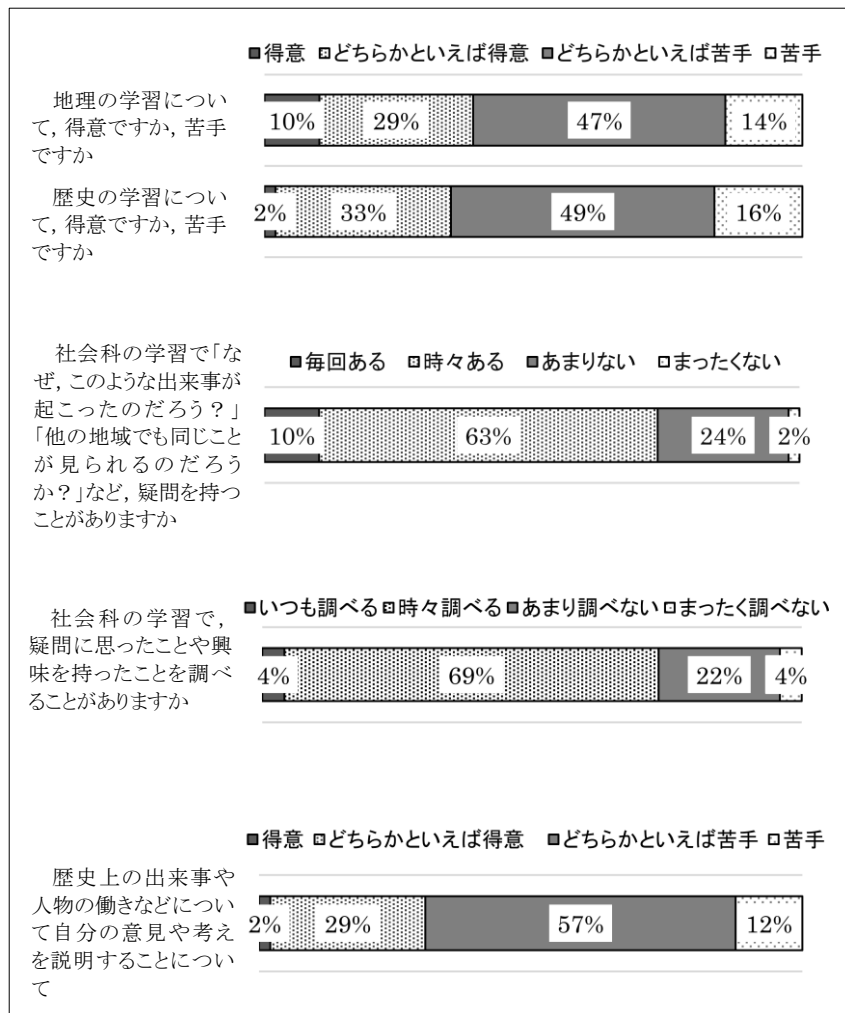


図1 社会科の学習に対する意識調査の結果（6月18日）（n=49）

自分の意見や考えを説明することについての質問に、全体の69%の生徒が「どちらかといえば苦手」「苦手」と回答している。自分の考えを他者に説明することに関して苦手意識を持つ生徒が多く、本校の課題と言える。

調査の結果を踏まえ、生徒が学習課題を解決するために必要なことを調べ、調べたことを基に自分の考えを形成することができるよう、単元指導計画や1時間単位の授業を組み立てることが本校の課題を解決するために必要なことと考える。

4. 2 指導対策

4. 2. 1 自分の考えを説明し合う学習を設定した単元指導計画について

(1) 単元を貫く学習課題の設定(図2)

新中学校学習指導要領では、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成を目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることを示しており、単元全体を見通し、単元を貫いた学習課題を設定することが重視されている。そこで、単元を貫く学習課題を、図2のように設定する。

はじめに生徒の実態をレディネステスト等で把握し、生徒の実態に即した単元の学習目標・評価を決める。単元の学習目標・評価は、新中学校学習指導要領で示された「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を生徒の具体的な姿で表す。次に、新中学校学習指導要領の指導内容を確認し、単元を貫く学習課題を設定する。

設定した単元を貫く学習課題を基に、単元指導計画と1単位時間の授業展開を作成する。単元指導計画は、1単位時間の学習の成果を積み重ねることと単元を貫く学習課題を解決できるものとなるように留意する。

単元指導計画と1単位時間の授業展開に基づき、授業を実践する。授業実践を通して生徒の学習の成果を見取り、設定した学習課題や授業展開の成果と課題を、次の単元を貫く学習課題の設定や単元指導計画の作成に生かす。

(2) 「課題を見いだす」「調べる」「話し合う」「作業する」「まとめる」の5つの学習活動を設定する単元指導計画

生徒が単元を貫く学習課題の解決に向けて資料から必要な情報を精査し、精査した情報を基に自分の考えを形成できること、他者に説明したり議論したりすることを通して考えを広げることができるよう、本研究では「課題を見いだす」「調べる」「話し合う」「作業する」「まとめる」の5つの学習活動を単元指導計画の中に意図的に設定する。

「課題を見いだす」学習活動では、単元の導入部に単元を貫く学習課題から生徒が質問をつくる活動を行う。質問をつくるために、「質問づくりの方法」¹⁾(以下、QFT)を活用する。具体的には、生徒一人一人がつくった質問をグループで共有し、単元を貫く学習課題の解決に向けて優先順位の高い質問を決める。グループで決めた優先順位の高い質問を学級全体で共有させる。

生徒が決めた質問を1単位時間の学習で解決する課題として、教師が単元の学習計画を作成する。

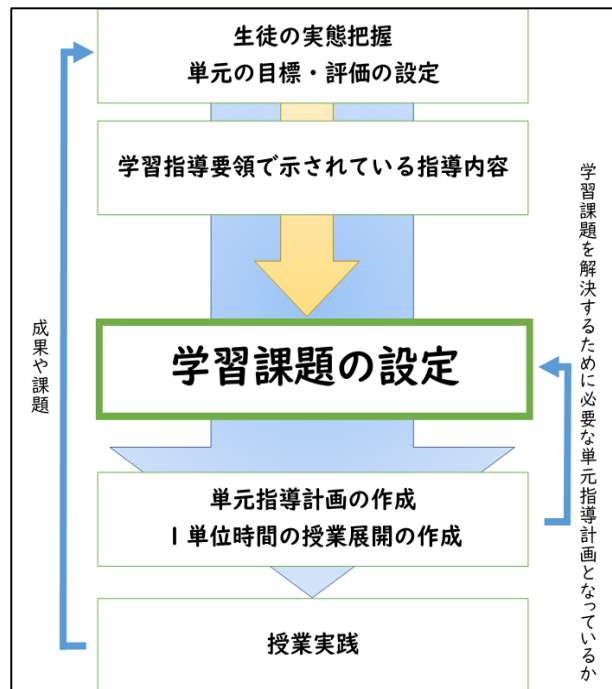


図2 単元を貫く学習課題の設定について

¹⁾「質問づくりの方法 (Question Formulation Technique)」(ダン・ロススタイン, ルースサンタナ 著 (2015)「たった一つを変えるだけ ― クラスも教師も自立する『質問づくり』 ― 」新評論)で示されている, 自ら問い, 自ら学ぶための手法。手順として, ①教師が質問の焦点を決める, ②教師が生徒にルールを紹介する, ③生徒が質問をつくる, ④生徒がつくった質問を書き換える, ⑤生徒が質問に優先順位をつける, ⑥生徒が質問の使い方を検討する, ⑦生徒が質問づくりを通して学んだことを振り返る, の7つがある。

このように生徒自ら課題を見だし、見いだした課題について単元を通して解決していくことは、生徒が見通しを持って学習に取り組むために有効であると考ええる。

単元を貫く学習課題の解決に向けて、単元の学習計画の中に「調べる」「話し合う」「作業する」「まとめる」の4つの学習活動を設定する。

「調べる」学習活動は、単元を貫く学習課題を解決するために地図やグラフなどの資料から情報を収集したり、読み取ったりする活動である。

「話し合う」学習活動は、課題の解決に向けて必要なことを話し合ったり、自分が考えたことや選択・判断したことを説明したり議論したりする活動である。

「作業する」学習活動は、調べて分かったことを地図にまとめたり年表を作成したりすることを通して、社会的事象を捉えるための活動である。新中学校学習指導要領社会科の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」では、地図や年表を読んだり、作成したりする作業的な学習活動を重視している。「作業する」学習活動を通して、生徒が社会的事象をより確実に捉えられるようにしたい。

「まとめる」学習活動は、「調べる」「話し合う」「作業する」の3つの学習活動を通して得られた学習成果をレポート等にまとめる。まとめは、国語科の教科用図書に記載されているまとめ方を活用してまとめさせたい。国語科の教科用図書には、調べたことと自分の主張を分けてまとめる方法やグラフ・表を使ってまとめる方法等について詳しく掲載されており、社会科の学習にも活用できる。

以上の5つの学習活動を単元指導計画の中に意図的に設定することで、生徒が自分の考えを形成するとともに、主体的に課題を解決する態度を身に付けさせることを目指すことができる考える。

なお、「調べる」「話し合う」「作業する」の3つの学習活動は、生徒の実態や学習内容に合わせ、1単位時間の中に1つ程度の学習活動を設定する。

(3) 自分の考えを形成する「もの」「ひと」「こと」「世界」の4つの視点 (図3)

生徒一人一人が考えを形成するためには、考えを形成するための視点が必要である。そこで本研究では「もの」「ひと」「こと」「世界」を、考えを形成するための視点とする。

「もの」「ひと」「こと」「世界」とは、社会の形成に関わっているものである。例えば、江戸幕府滅亡時における日本の社会を形成する「もの」として蒸気機関や米などがある。「ひと」は西郷隆盛や木戸孝允を代表とする下級武士など、「こと」は日本の開国や大政奉還など、「世界」はアメリカやイギリスなどが挙げられる。それぞれの社会は、どのような「もの」「ひと」「こと」「世界」が関わって形成されているのか、読み解くための視点として本研究で活用する。

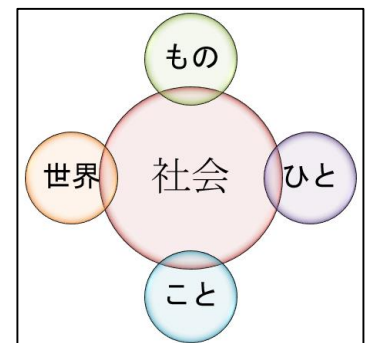


図3 自分の考えを形成するための4つの視点

1単位時間の授業では、「もの」「ひと」「こと」「世界」の中から学習のねらいに照らし合わせて2つ程度の視点を設定し、設定した視点を基に学習した成果をまとめる。単元のまとめでは、各時代や各地域の社会がどのように形成されているのか、学習した成果を基に自分の考えをまとめる。

4. 2. 2 自分の考えを説明し合う学習について

(1) 「話し合う」学習活動を設定した1単位時間の授業

「課題を見いだす」「調べる」「話し合う」「作業する」「まとめる」の学習活動のうち、「話し合う」学習活動で自分の考えを説明し合う学習を行う。

「話し合う」学習活動を設定した1単位時間の授業では、学習課題の解決に向けて精査した情報を基に、学んだことや自らの生活経験を関連付けながら自分の考えを形成し、他者と説明し合ったり、議論したりすることを通して、学習課題をよりよく解決する。他者と説明し合う中で、自分の考えが不十分であると生徒が感じた場合は、考えを修正させる。また、話し合う中で新たに調べたいことがある場合、適宜各種資料を活用して調べることができる場を整える。自分の考えを説明し合う学習では、より多くの人に説明して多様な意見を得ることで自分の考えを広げることができるよう、時間を確保する。生徒同士で説明し合う時は、自分の考えと相手の考えの相違点に着目させる。自分の考え

と相手の考えとの相違点はノートに書き、相違点を参考に自分の考えをよりよいものに修正したり広げたりすることにつなげさせ、学習課題をよりよく解決させる。

授業の終末部には、「話し合う」学習活動を通して学んだことをまとめる時間を設定する。

(2) 「話し合う」学習活動の課題

「話し合う」学習活動においては、生徒が課題を自分事として捉え、考えを持つことができる課題であることが重要である。また、自分の考えを説明し合うことを通して、考えを広げることができる課題を設定する。生徒一人一人が自分の考えを持ち、他者と説明し合うことを通して、考えを広げることができる課題となるよう、首都圏模試センターの思考コード(図4)を参考にして、課題を作成する。

思考コードは、「どの程度の知識が必要なのか」(図4では縦軸)と「どの程度の思考の深さが必要なのか」(図4では横軸)の2つの軸によって構成

変換操作	全体関係	変容3	A 3 ペリーに関することとして正しい選択肢を全て選び、年代の古い順に並べなさい。	B 3 開国は当時の日本にどのような影響を及ぼしたのか、説明しなさい。	C 3 あなたが、ペリーのように日本と外交関係のない国に行き、その国と外交関係を結んで友好関係を築くために、どのようなことをしますか。あなたの考えを説明しなさい。
複雑操作	カテゴリーズ	複雑2	A 2 ペリーに関することとして正しい選択肢を全て選びなさい。	B 2 開国を主張した人物を一人あげ、その人物が行ったことと、その目的を説明しなさい。	C 2 未来から来たあなたが、産業革命時のイギリスの資本家と労働者双方がよりよい仕事を行うことができるように、工場法を作り直すとしたらどのように作り直しますか。理由を含めて説明しなさい。
手順操作	単純関係	単純1	A 1 (ペリーの写真を見て)この人物の名前を答えなさい。	B 1 ペリーが日本に来た目的を説明しなさい。	C 1 未来から来たあなたが、独立戦争終結時によりよいアメリカの国になるように、独立宣言に新たな条文を加えるとすればどのような条文を加えるか、あなたの考えを説明しなさい。
(数)	(言語)		A 知識・理解思考 知識・理解	B 論理的思考 応用・論理	C 創造的思考 批判・創造

図4 思考コード

出典 おおたとしまさ『子供の学力の新観点『思考コード』を知っていますか?』より一部改編

されており、どの段階までの思考を問うのかを探る指標となる。本研究では、生徒が持っている知識や生活経験を生かして考えを説明し合う学習ができるよう、創造的思考の課題(図4では、「C 創造的思考」の縦軸)を設定する。創造的思考の課題は、KO2ページの「2. 3 『自分の考えを説明し合う学習』について」で述べた3つの留意点(① 生徒が持っている知識や生活経験を生かせること、② 生徒が社会的な見方・考え方を働かせることができること、③ 生徒が他の生徒と協力しながら解決できること)を踏まえた学習を行う上で有効であると考ええる。

例えば、イギリスとアメリカの市民革命の学習では、「未来から来たあなたが、独立戦争終結時によりよいアメリカの国になるように、独立宣言に新たな条文を加えるとすればどのような条文を加えるか、あなたの考えを説明しなさい。」のような課題を用いて、生徒が自分の考えを説明し合う学習を行う。この課題では、当時のイギリスによる植民地支配の問題点や独立宣言の内容などの習得した知識や、平和主義など既に持っている知識・経験を生かして自分の考えを形成することが必要である。

また、新たな条文を考えるには、独立戦争終結当時のアメリカの状況や条文を新たに付け加えることによる後のアメリカに与える影響など、時期や影響に着目して捉える必要がある。つまり、社会的な見方・考え方を働かせて選択・判断し、自分なりの答えを導き出すことが求められる。

さらに、答えが1つではなく、「自分なら」という条件が加わり、様々な知識を活用したり経験を踏まえたりしながら考え、判断することから、生徒一人では解決が難しくなる。最適解を求めて他者と協力しながら追究し、よりよく解決することが必要である。

以上のように、3つの留意点を踏まえ、生徒が自分の考えを持って説明し合う学習を効果的に行うために、創造的思考の課題を設定することは有効であると考ええる。

課題を作成する際は授業のねらいに迫ることができるよう、「未来から来たあなたが(Who)」「独立戦争終結時に(When)」「よりよいアメリカの国になるように(Why)」のように6W2Hなどを使って課題を作成するなど、課題の内容にある程度の制限をかけることに留意したい。

(3) 学習の振り返り

主体的に学ぶ生徒を育てるには、学習を振り返り、次の学びにつなげることが欠かせない。本研究では、1単位時間の学習の振り返りの場において、2つの振り返りを行う。

1つ目は、学習した内容を確認する振り返りである。授業の終末時に学習した成果を各自のノートにまとめることで、学習内容を確認する。

2つ目は、学習を通して自己の変容に気付いたり、感じたりする振り返りである。この振り返りでは、「自分の学びの振り返りシート」(図5)を使って自己の変容について振り返らせる。

シートには1単位時間毎に自己の学びについて、「やってみて、よかったこと」「やった方がよかったこと(やれなかったこと、やらなかったこと)」の2点で振り返り、シートに記述させる。シートには毎時間の振り返りを記述できるように記述欄を設け、蓄積できるようにした。

シートを活用して生徒が自己の学びについて振り返ることを通して、学習を総括して改善点を見つけ出すことができると考える。見つけ出した改善点を次の学びにつなげ、PDCAサイクルを回すことができるようになることで、主体的に学ぶ態度を身に付けさせることができると考える。

社会科 自分の学びの振り返りシート 2年 組 番 名前:				
「1節 欧米の進出と日本の開国」の学習課題 なぜ、欧米諸国はアジアに進出したのだろうか。また、日本が開国したことにより、国内にどのような影響を与えたのだろうか。この2つについて、自分の言葉で説明できる。				
時間	授業日	学習内容	今日の自分の学びを分析しよう	
			・やってみて、よかったこと	・やった方がよかったこと(やれなかったこと、やらなかったこと)
1	/	質問づくり	やってみて、よかったこと	やった方がよかったこと
2	/	イギリスとアメリカの革命と変化		
3	/	フランス革命と変化		
4	/	産業革命によるヨーロッパの変化		

図5 自分の学びの振り返りシート

5 実践検証

5.1 所属校での実践検証

- (1) 単元名 「欧米の進出と日本の開国」
- (2) 実践期間 令和元年10月18日(金)～11月19日(火)

5.2 実践検証の考察

- (1) 単元を貫く学習課題の設定について

本単元の学習を通して自分の考えを説明する力を高めたいと考え、単元を貫く学習課題を「なぜ、欧米諸国はアジアに進出したのだろうか。また、日本が開国したことにより、国内にどのような影響を与えたのだろうか。この2つについて、自分の言葉で説明できる。」と設定した。歴史的分野の学習に苦手意識を持つ生徒が全体の半数以上を占める実態を踏まえ、単元を貫く学習課題を「なぜ、欧米諸国はアジアに進出したのか、自分の言葉で説明できる。」と「日本が開国したことにより、国内にどのような影響を与えたのか、自分の言葉で説明できる。」の2つに分け、小単元を貫く学習課題として設定した。この2つの小単元を貫く学習課題を解決することを通して、単元を貫く学習課題を解決できるよう単元指導計画を作成し、実践を行った。

実践では単元及び小単元を貫く学習課題を毎時間確認してから学習に臨ませたことで、学習したことが学習課題の解決にどのようにつながっているのか、生徒に考えさせることができた。「まとめる」活動では、小単元を貫く学習課題について生徒に記述させた。「産業が発達し、いろいろな工業製品が大量に生産できるようになり、これらを輸出してアジアから上質な絹などを輸入するため。また、戦争に勝利し、植民地を拡大させ、支配するため。」など、概ね満足できる記述であった。しかし、生徒が記述したものの中には誤った理解による回答もあった。無回答も50名中3名おり、課題が残った。

- (2) 「課題を見いだす」「調べる」「作業する」「まとめる」の学習活動について

「課題を見いだす」学習活動では、QFTを活用して小単元を貫く学習課題を解決するために必要な質問を生徒一人一人につくらせた。全ての生徒が1つ以上の質問をつくることができた。生徒の中には、12個の質問をつくった生徒もいた。その後のグループの話し合いで、個人がつくった質問の中から、小単元を貫く学習課題の解決に向けて優先順位が高いものを3つ選ばせ、学級全体で共有した。グループからは、「なぜ、欧米諸国だけが進出できたのか」「欧米諸国がアジアに進出するメリットは何か」などの質問が優先順位の高い質問として挙げられた。学習活動の振り返りでは、QFTを通して学んだことを記述させた。生徒からは、「質問を考えることで自分たちの分からないことが分かり、なぜ？とか、どうして？とか、どうやったら？という疑問もすごく大切だと思いました。そのどうして？からつながって分かったになると思うので、細かく質問を考えることはすごく大切だと思いました」などの回答があった。QFTの活用により、生徒が主体的に課題を見いだすことができた。各グループから出された質問を基にして教師が小単元の学習計画を立て、学習を進めさせた。

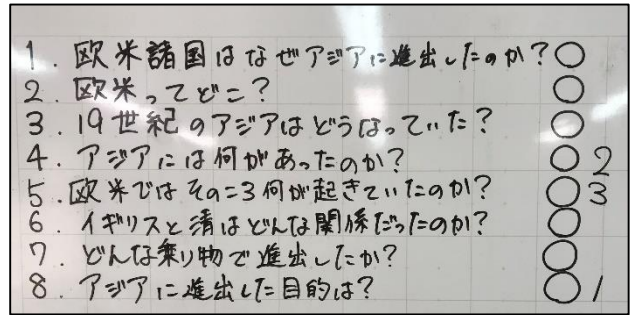


写真1 グループから出た質問

「調べる」学習活動では、地図や絵などの資料から情報を収集させたり、読み取らせたりする活動を行った。19世紀中ごろのユーラシア大陸の地図から欧米諸国がどこに進出したのか読み取る学習では、地図の見方や自分が読み取ったことが正しいのか他の生徒と確認するなど、生徒は概ね意欲的に調べていた。

「作業する」学習活動では、欧米諸国が進出した地域の地図を作成させた。地図は、大西洋中心の白地図を用意し、欧米諸国が大西洋からインド洋を経てアジアに進出した様子が分かるよう地図を作成させた。友達と相談しながら地図を作成する生徒や、作成した地図を他の生徒に紹介する生徒もいた。

「まとめる」学習活動では、学習した成果をノートにまとめさせた。写真2のように、イギリス、アメリカ、フランスの市民革命について表を使ってまとめたり、資本主義についてイラストを描いてまとめたりするなど、見て分かるよう意識してまとめている。

イギリス	アメリカ	フランス
政治の中心に国王と議会 ↓ 国王が議会を無視し、政治を執る。 ↓ 議会の側で反乱が起る。 ↓ 議会議長がクロムウェルの指導で勝利し、国王を処刑して共和政を開始。(名誉革命) ↓ クロムウェル死後、国王中心の政治にもどる。 ↓ 国王が専制を！ ↓ 1688年から89年の革命で、国王の権力を奪取する国王が選ばれる。権利宣言が定められる。 ↓ 世間初の立憲君主制と共和政治が始まる！	イギリスの植民地に新税を課す。 ↓ アメリカで反乱運動が起る。 ↓ 独立戦争 ↓ 独立宣言 ↓ 初代大統領に、独立戦争の司令官ジョージ・ワシントン ↓ 世間初の大統領制になる。 ↓ 奴隷制が廃止された。 ↓ 1688年から89年の革命で、国王の権力を奪取する国王が選ばれる。権利宣言が定められる。 ↓ 世間初の立憲君主制と共和政治が始まる！	国王が政治権力を握り、議会は閑居する。(絶対王政) ↓ 身分による富の差が大きくなり、第1身分(貴族)と第2身分(貴族)は免税などの特権を持ち、第3身分(平民)は人口の約90%を占める。 ↓ 国王と第1、第2身分にも課税を課し、議会の権力を弱くする。 ↓ 身分の特権を廃止し、開明の自由と平等、国民主権、言論の自由、私有財産の不可侵性を唱える。人権宣言を発表。 ↓ 国王を処刑し、共和政を開始。 ↓ フランス革命 ↓ 共和政を開始。 ↓ 共和政を開始。 ↓ 共和政を開始。

写真2 生徒の学習のまとめ

(3) 「もの」「ひと」「こと」「世界」の4つの視点を用いた学習のまとめ

「まとめる」学習活動では、4つの視点を用いてそれぞれどのようなものが当てはまるのかを1つずつ考えさせる学習も行った。アヘン戦争当時のイギリスを形成する「もの」「ひと」「こと」「世界」はそれぞれどのようなものがあるか、考えたものをワークシートに語句で書き出させた。その後、グループでそれぞれの考えを共有し、書き出したものを関連付けて文章にさせた。生徒のワークシートを見ると、4つの視点について語句

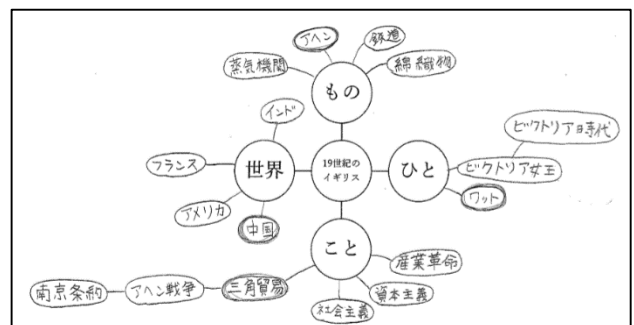


写真3 4つの視点についての生徒の記述

で書き出すことは概ねできていた。しかし、書き出したものを関連付けて文章にすることができない生徒もいた。語句を関連付けて文章にできるよう、常に生徒に意識させることが必要である。

(4) 「話し合う」学習活動と創造的思考の課題について

イギリスの植民地支配から独立し、南北戦争までのアメリカの歴史について学習した後、創造的思考の課題を用いて「話し合う」学習活動を行った。創造的思考の課題は、「未来から来たあなたが、独立戦争終結時によりよい国（アメリカ）になるように、独立宣言に新たな条文を加えるとすればどのような条文を加えるか、あなたの考えを説明しなさい。」とし、生徒に提示した。生徒の思考が広がるよう、よりよい国になるために必要なことについてイメージマップを作成させ、書き出したものを基に条文を考えさせた。友達に相談したり、自分とは違う考えを持つ友達に聞いたりしながら自分の考えをまとめられるよう、生徒同士で追究できる時間を25分確保した。学習活動中は、アメリカの歴史について調べ直す生徒や考えた条文について他の生徒に意見を求める生徒の姿が見られた。生徒が考えた条文とその理由として、次のようなものがあった。

（条文）「また、相手の立場に立ち、考え、話し合いを行う。人種差別をすることなく、相手を尊重し、協力する。奴隷という形ではなく、相手を一人の人間として敬意の気持ちを持つ。自他共に大切な命であるという意識を高めることが必要である」

（理由）「もとの条文は、『皆平等』という言葉はあるけれど、生命、自由、幸福だけでは自分中心な部分があるのでは？と思ったから、これによって、視野が狭くなり、奴隷や戦争が起きたと思うから」

この生徒の条文は、奴隷制をめぐるアメリカ国内で対立が起こり、南北戦争に発展したことを踏まえた内容となっている。他の生徒も同様に、学習したことを踏まえて条文を考えさせることができた。一方、自分の考えを持つことができない生徒が一人おり、課題が残った。

(5) 学習の振り返りについて

「自分の学びの振り返りシート」を使い、自分の学びについて毎時間振り返りを行った。やってみてよかったこととして、「地図にまとめると世界の全体の様子が分かっていいと思いました」「分からないことをしっかりと聞き、分からない人に教えた」などの回答があった。

やった方がよかったこととしては、「友達に聞いて分からないところを分かるようにするところができなかったの、次から友達に聞いて分かるようにしたいです」「フランス、アメリカ、イギリスでそれぞれ何があったか書く時に、僕は文章で書きましたが、表などにするのもよいと思いました」などの回答があった。

生徒の回答は次時の授業で紹介し、学級全体で共有した。級友の回答を参考にして、分からないところを複数の友達に聞いたり、地図や表を使って調べたことをまとめたりするなど、生徒の学ぶ姿が変化した。

(6) 社会科の学習に対する生徒の意識の変化について

11月20日に2回目の実態調査を行った。調査結果は図6のとおりである。地理の学習について、「得意」「どちらかといえば得意」と回答した生徒は、全体の60%であった。歴史の学習については、「得意」「どちらかといえば得意」と回答した生徒が全体の48%であり、6月の調査結果と比較すると13%増加した。

社会科の学習で疑問を持つことについて、「毎回ある」「時々ある」と回答した生徒は全体の9割であった。「まったくない」と回答した生徒はいなかった。これはQFTを活用し、「課題を見いだす活動」を行ったことの成果の表れだと考えられる。

疑問や興味を持ったことを調べることについて、「いつも調べる」「調べる」と回答した生徒は全体の約9割となり、「まったく調べない」と回答した生徒はいなかった。この結果について、単元指導計画の中で「調べる」学習活動を意図的に設定し、疑問に思ったことを調べる時間を十分に確保したことが調査結果に表れたと捉える。

自分の意見や考えを説明することについて、「どちらかといえば苦手」「苦手」と回答した生徒は全体の58%であり、6月の調査結果より11%改善した。単元指導計画の中に「話し合う」学習活動を意図的に設定し、自分の意見や考えを説明させたことが、6月の調査結果に比べて肯定的な回答をした生徒の増加につながったと考えられる。しかし、苦手意識を持つ生徒は、全体の半数を超えており、課題が残った。

6 今後の課題

- (1) 「課題を見いだす」「調べる」「話し合う」「作業する」「まとめる」の5つの学習活動を設定する単元指導計画の再検討

「課題を見いだす」学習活動では、QFTを活用して数多くの質問をつくることができた。しかし、生徒が全ての質問について調べることはできなかった。生徒ががつくった質問を調べることができるよう、「調べる」学習活動の時間を十分に確保することが課題である。そのためには、教師からの説明を精選し、学習活動を焦点化する必要があると考える。生徒が調べたいことを調べられるよう、調べ方の指導もしていきたい。

(2) 自分の考えを持つことができない生徒への支援

生徒が自分の考えを説明し合う学習活動では、概ね自分の考えを説明することができた。しかし、学習課題の内容を理解できず、自分の考えを持つことができない生徒もいた。学習課題の内容を個別に丁寧に説明するなど、具体的な支援の方法を考えたい。

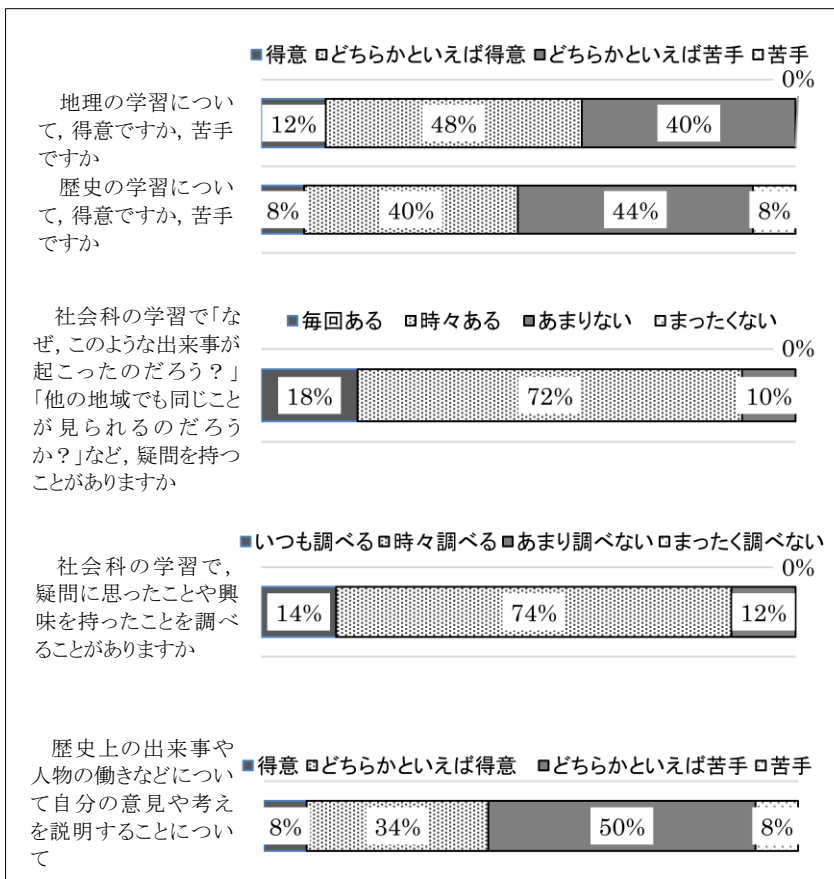


図6 社会科の学習に対する意識調査の結果（11月20日）（n=50）

引用・参考文献

- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領」
 文部科学省（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」 p.138.
 奥田眞丈、水越敏行編（1994）「新学校教育全集8 教科指導」 ぎょうせい p.131-138.
 奈須正裕編著（2017）「教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブック ― 資質・能力を育成する15の授業プラン ―」 明治図書 p.19-27.
 青柳慎一著（2015）「中学校社会科 授業を変える課題提示と発問の工夫45」 明治図書 p.12
 ダン・ロススタイン、ルースサンタナ著（2015）「たった一つを変えるだけ ― クラスも教師も自立する『質問づくり』 ―」 新評論
 金洋太（2018）「児童が主体的に問題解決に取り組む小学校理科授業を目指して ― 児童が行う質問づくりと一枚ポートフォリオ評価の工夫を通して ―」 平成30年度長期研修成果報告書
 おおたとしまさ「子供の学力の新観点『思考コード』を知っていますか?」
<https://www.syutoken-mosi.co.jp/column/entry/entry000668.php>

図表等の許諾について

図1～4、9は実態調査の結果一覧表であり、所属校校長の使用許諾を得た。
 写真2、3は、授業実践中に生徒が記入したワークシート、ノートの一部である。記入生徒の氏名を伏せて資料として活用することとし、生徒の保護者から許可を得た。